

担当する県をクリック

476件がデータベースに存在しました。
(検索キーワード: 小学校)
そのうちの21-40件を表示しています。

Yahoo!カテゴリとの一致

検索キーワードをテーマにしたページが下記のカテゴリで一覧できます。

- 地域情報: 日本の地方: 近畿: 奈良: 教育: 小学校
- 地域情報: 日本の地方: 近畿: 兵庫: 教育: 小学校
- 地域情報: 日本の地方: 近畿: 和歌山: 教育: 小学校
- 地域情報: 日本の地方: 四国: 愛媛: 教育: 小学校
- 地域情報: 日本の地方: 四国: 香川: 教育: 小学校
- 地域情報: 日本の地方: 四国: 高知: 教育: 小学校
- 地域情報: 日本の地方: 四国: 徳島: 教育: 小学校
- 地域情報: 日本の地方: 信越: 長野: 教育: 小学校
- 地域情報: 日本の地方: 信越: 新潟: 教育: 小学校
- 地域情報: 日本の地方: 中国: 岡山: 教育: 小学校
- 地域情報: 日本の地方: 中国: 鳥取: 教育: 小学校
- 地域情報: 日本の地方: 中国: 島根: 教育: 小学校
- 地域情報: 日本の地方: 中国: 広島: 教育: 小学校
- 地域情報: 日本の地方: 中国: 山口: 教育: 小学校
- 地域情報: 日本の地方: 東海: 愛知: 教育: 小学校
- 地域情報: 日本の地方: 東海: 岐阜: 教育: 小学校
- 地域情報: 日本の地方: 東海: 静岡: 教育: 小学校
- 地域情報: 日本の地方: 東海: 三重: 教育: 小学校

一校を選んでクリック

5



ホーム: 地域情報: 日本の地方: 東海: 愛知: 教育: 小学校

検索: 検索オプション

◎ 全検索 ○ 小学校以下から検索

- 愛知県知多市立旭南小学校: 学校紹介やブラジル人日本語教室、FBC (花作り) の紹介、6年生の活動案内等。
- 愛知県南知多町内の小・中学校: 愛知県の知多半島先端にある海辺の9校と島の4校の紹介。
- 福西小学校: ログハウスの風情や図書館や学校の様子等を紹介します。
- 大口西小学校: 給食改善研究を行っている大口西小学校。さまざまな工夫をして、楽しいランチタイムの実践をしている。
- 岡崎市立井田小学校: 岡崎市立井田小学校のホームページ
- 岡崎市立藤川小学校: 各学年、学科の簡単な紹介とパソコン実践授業の様子や設置機器の紹介。
- 小牧市立藤岡小学校5年1組: 学級通信のオンライン版、「福祉教室のページ」や学級日記、写真集等。
- 小牧市立村中小学校: 「元気印」児童会や「教室ウオッチング」、「HOTニュース」等。
- 豊田市の小学校訪問: 豊田市内のトヨタ自動車本社周辺にある小学校15校の紹介。各校の概要や特色ある活動を掲載。
- 岡崎市立東広瀬小学校: 学校紹介や、学区に流れている矢作川を中心に環境教育に取り組む様子等を掲載。
- 豊橋市立新川小学校: 豊橋市中心部に位置する、同校の特色ある教育活動を紹介。市内の小中学校へのリンク集も併設。
- 豊橋市立松葉小学校: 職員紹介や生徒による壁新聞を掲示。
- 半田小学校PTA: 愛知県半田市の半田小学校のPTAだより。図書部、環境厚生部等、各部の活動報告を掲載。
- 名古屋市立瑞穂小学校: 通塾の上に住つ、名古屋市立瑞穂小学校のページ。学校の紹介や、コンピュータクラブの子供たちが作った作品集などを掲載。
- 羽根井小学校: ニュージーランドの小中学校との国際理解教育の全容及び学芸会のノウハワを掲載。

これが日本のプロバイダだ!! Yahoo! JAPAN 5万人アンケートで分かった!!
これは本当に驚き! 満足できるプロバイダ選びの条件を徹底解説

つながらない。もししくは作動したページを発見しましたらfeedback@yahoo.co.jpまでお知らせください。

Copyright (C) 1994-97 Yahoo! All Rights Reserved.
Copyright 1996-97 Yahoo Japan Corporation All Rights Reserved.

3

サーチエンジン YAHOO で検索


地域情報をクリック

DESTINATIONS

サーチエンジン

イタリア語 | 英語 | スペイン語 | ドイツ語 | 日本語 | フランス語

Note-In-One Infoseek Japan Yahoo Japan Acananet



 検索情報 ケール ニュース ヘルプ

キーワードを入力:

検索

テレビ番組 Yahoo!お天気 Yahoo!Education 今週のオススメモ 新着Web

- インターネット
- エンターテインメント
- コンピュータ
- ビジネスと経済
- メディアとニュース
- 各種資料と情報源
- 教育
- 三術と人文
- 健康と医学
- 自然科学と技術
- 社会科学
- 趣味とスポーツ
- 生活と文化
- 政治
- 地域情報

● ゲーム ● テレビ ● 音楽 ● 企業 ● 芸能人 ● 新聞


Yahoo!USA - Yahoo!Internet Guide

4

キーワード小学校を入力

YAHOO! JAPAN

ニュース 天気 ヘルプ



 ニュース 天気 ヘルプ

ホーム: 地域情報

オプション

◎ 全検索 ○ 地域情報以下から検索

- サブカテゴリリスト

検索

● 世界の国と地域 (1661) News
 ● 世界の地方 (138) News
 ● 地理学 @
 ● 郵便用票 (1955) News
 ● 日本の地方 (319) News

Yahoo! USAの同ーカテゴリへ

APPENDIX 2

1

1 ネット検索開始



(1)画面上のNetscape のアイコンをクリック

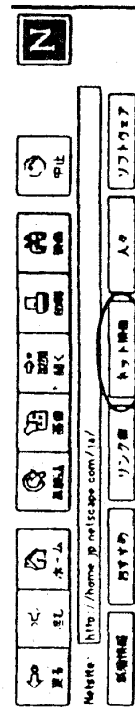
(2)Netscape Navigator のインストールローが立ち上がる

画面



インストールローが立ち上がったところ

(3)ネット検索をクリック



〔ネット検索〕のボタンを押す

(4)次ぎの画面から Yahoo Japan をクリックし、続いて 地域情報 を

クリック (3 参照)

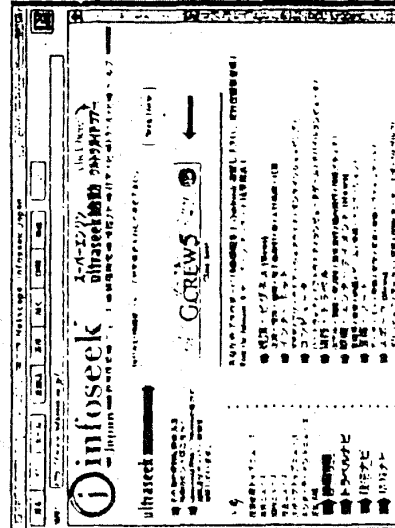
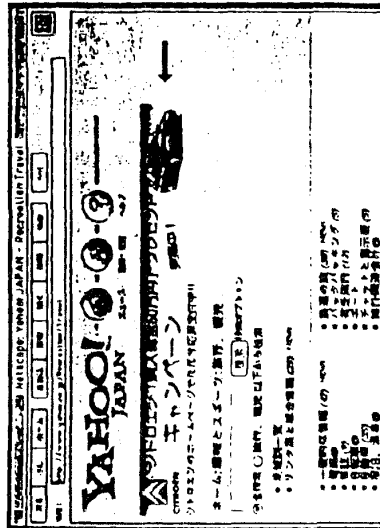
(5)次ぎの画面に 小学校 を入力 (4 参照)

(6)次ぎの画面から担当する県をクリック (5 参照)

(7)次ぎの画面から一校を選んでクリック (6 参照)

2

サーチエンジンの例 YAHOO と infoseek



③検索サービス「ヤフージャパン」のバナー広告
④検索サービス「infoseek」のバナー広告

APPENDIX 1

演習 1A (松原)

インターネットを体験しよう

1 あなたが担当した県ではいくつの小学校がホームページを開いて
()校
いましたか

2 あなたが選んだ小学校名(例えば東京都杉並区立桃井第四小学校の
ようにフルに)書いてください

3 あなたがその小学校を選んだ理由はなんですか

4 あなたが選んだ小学校のホームページはだれが開いたものですか
(学校 ある学年 あるクラス 職員有志 その他教育委員会等)

5 あなたが選んだ小学校のホームページからなにがわかりましたか

6 小学校のホームページにどんな意味があると思いますか
あまり意味がないと思いますか

7 小学校のホームページにはどんなことを載せるといいと思いますか

8 インターネットを体験してみてなにが困難だと思いましたか

9 ☐印刷を最後にクリックするまでにどれくらい時間がかかりましたか

10 どこでやりましたか(図書館 研究室)
一度でうまくいかなかった場合は全部書いてください

11 図書館ガイドのとき以前にマウスの操作をしたことはありますか
ない ある(いつ、どこで)

12 インターネットにやり方はわかりましたか
まだわからない なんとなくわかった わかった
(理由は?) 思っていたより簡単でしたか
感想は

13 今後どんなページを見たいと思いますか

14 小学校でインターネットを利用する場合どんな教育利用が考え
られますか

- (19) シンガポールの教育制度から最新のニュースまで教育に関する情報は Ministry of Education (<http://www.moe.edu.sg>) のホームページからアクセス可能。
- (20) 岐阜県(16校)、愛知県(16)、埼玉県(14)、徳島県(13)、茨城県(11)、神奈川県(10)、兵庫県(10)、静岡県(10)、熊本県(9)、秋田県(8)、滋賀県(8)、奈良県(7)、愛媛県(6)、京都府(6)、香川県(6)、鳥取県(5)、大阪府(5)、千葉県(5)、鹿児島県(5)、長野県(5)、岡山県(4)、富山県(3)、島根県(2)、長崎県(2)、高知県(1)。
- (21) 佐伯胖前掲書 pp.147～149 参照。
- (22) 朝日新聞、1997年10月3日(金)(朝刊) p.1
- (23) Jones, Jennifer、Providing Computer Access for Students, 「Computer Education for 21st Century 予稿集」 pp.51～55。
- (24) 現在のところほとんどが英語で、日本語情報はこれからの課題である。

- ーこれらの構成物と広く浸透している価値観の社会的、文化的、政治的、経済的意味の意識化を促進する。
 - ーメディアの評価と芸術的理解を深める。
 - ーメディアに包含されている文化的営み、価値観、理念を確認し、検証するためにメディア作品を解読する
 - ーメディア作品をつくるために使われる多様なテクニックを確認し、解釈し、経験する。
 - ーメディア作品を構成する人たちはさまざまな動機、支配、緊張などに従属していることを認識する。それらは経済的、政治的、組織的、技術的、社会的、文化的要素をもっている。
 - ー誰もがメディア・テキストを検証する際には選択的で、推論的なプロセスをたどることを認識する。このプロセスとそこから得られる意味は心理的、社会的、文化的そして環境的な要素に依存している。
- (6) 第二回PCカンファレンスシンポジウム(1997年8月4日～8月6日於同志社大学)の「小中学校分科会」においても、またイブニングトーク「小学校におけるインターネット利用のあり方」においても、現場教師からのこのような発言は多くあった。
- (7) 神奈川大学附属中・高等学校では“自己認識”、“他者認識”を学習テーマとして、Hyper Cardを用いた生徒各自のホームページ“My History Album”の作成を行っている。『学校にインターネットがやってきた!～神奈川大学附属中・高等学校～』『アップル教育事例集 Case 1』(Apple Computer, Inc. 1996)。
- (8) 京都市内の公立小学校の場合、全小学校(183校、うち分校2校)にWin 95 ないしは Win 3.1 マシンが設置されている。各校の設置台数は21台(コンピューター・ルームをもつ学校の場合)と7台に分かれるが、順次21台に統一する計画である(資料:第二回PCカンファレンス、イーヴニング・トークから。資料提供者:丸山修)
- (9) 辻元弘(京都市京田辺市薪小学校)『小学校でのインターネットを活用した情報教育活動の報告』『'97PCカンファレンス予稿集』p.123.
- (10) 石原一彦(大津市立平野小学校)『平野小学校の情報教育』『'97PCカンファレンス予稿集』pp.118～121.
- (11) ここでは“メディア・リテラシー”はメディア活用能力の“技能”という意味で用いられている。
- (12) “発信”はたといつ、誰がみてくれるかはわからないとしても、オーディエンスを意識したものである。従って、個人の感性の表出を目的とする表現とは性格を異にする。“発信”ではなにを、どう伝えるか、そこに各自の創意工夫が求められる。
- (13) インターネットの歴史に関しては、古瀬幸広、広瀬克哉著「インターネットが変える世界」(岩波新書1997)参照。
- (14) 佐伯胖著「新・コンピューター教育」(岩波新書、1997年) p.145.
- (15) convivial, conviviality の訳出もむつかしく、その意味するところは“みんなで一緒にいきいき楽しい”と解されるが、古瀬/広瀬の前掲書では“共愉”、あるいは“共愉的”という訳を与えている。
Tools for Conviviality by Ivan Illich : <http://www.design-inst.nl/doors/doors4/library/illich-tools.html>
- (16) The Ethical Spectacle--November1995 : <http://www.spectacle.org>
- (17) チョムスキーに関しては下記参照。
The Noam Chomsky Archive : <http://www.worldmedia.com/archive/>
- (18) Media Awareness Network : <http://www.screen.com/mnet/>
Mediacy Article, Why Teachers Fear The Internet : Many teachers must learn to see the Internet as an ally rather than a threat by Crawford Killian : <http://www.screencom/MNET/ENG/MED/CLASS/SUPPORT/MEDIACY/NEWT NEWTECH/WH>
を参照。他多数。

キーを叩く際にでるノイズ、ヒートなど解決しなければならない問題は少なくない。10人を越えない生徒が円形のテーブルを囲む形で授業が進められるオーストラリアの教室では、天井からテーブルの中心に下がっている電源にプラグインするだけでよい。さらに日本、韓国、台湾の場合小中学校でコンピューター教育をしても受験のために高校での継続がむづかしく途中でストップしてしまう。英語を主とする外国語の習得も課されておりこの点でもオーストラリアの子供たちよりも負担が大きい。

半年にわたって学校および教育関連のサイトの検索を続けてきて実感したのは大学をはじめとする教育関係の非営利組織によってインターネット上に発信されている教材の充実である。これまで想像もできなかったことであるが教師がその気になれば教材に利用可能な世界の最新情報を容易に入手できるか、もしくは入手する方法を知ることができる。インターネットは教師がよりよい授業を行うためのアイデアの宝庫ともいえる。⁽²⁴⁾ 教育の分野に関しては“コンヴィヴィアルな学びの場”の構築や、“知の共有”が実現しつつある。しかし注意しなければならないのはインターネットは誰もが発信者になれること、また草の根からはじまったものであることからそもそもがアナーキーなものだということである。アナーキーな状態のなかで迷子になって時間を無駄にしないで済むように、シンガポールでは Internet Educational Resources Committee のもと全レベルの学校の教師に教育省のスタッフも加わって、Internet Educational Resources のサイトに英語、地理、歴史、数学、科学の教材を送り出している。またここから海外の教育関係サイトへとリンクされている。カーネギー・メロン大学のリテラシー教育サイト、EEN (Education Excellence Net-work) のホームページなど目ぼしいものがまとめて紹介され、マスメディア利用教育の道しるべの役割をはたしている。子供たちがインターネットを学習のためのツールとして活用していくためにアナーキーな状態のなかで自分自身の道しるべを見つけ出せるように導くメディア・リテラシー教育の重要性を再確認したい。

註

- (1) AMLはカナダのMedia Literacyのウェブ・サイトからアクセス可能。その他100を越える組織がリストされている。
- (2) 原文の construct は構成と訳されるのが一般的だが、その意味するところは組み立てられたもの、ある部分は作り出されたものでもある。しかし虚構というわけではない。
- (3) 原文は negotiate である。見るものがそれぞれに意味を読み取る。したがって解釈は一様ではない。
- (4) Eight Key Concepts of Media Literacy は Media Awareness Network のウェブ・サイトからアクセス可能。1989年発行の The Media Literacy Resource Guide, Ontario Ministry of Education からの要約。オリジナルからの翻訳はカナダ・オンタリオ州教育省編、FCT (市民のテレビの会) 訳 「メディア・リテラシー — メディアを読み解く」リベルタ出版 (1992年)、pp. 8～11。
- (5) A Media Literacy Page (<http://home.earthlink.net/macnw/literacy.html>) に National Telemedia Council Inc. からの引用が紹介されている。メディア・リテラシー教育が目指すべき必要事項はカバーされている。AML はより詳しく次ぎの7項目を掲げている。(AML、前掲書、pp. 7～8)
—メディアが現実を構成するやり方を解説するのに必要な技能、知識、態度を育成する。

ができるがあげられたにとどまっている。「調べ学習」にインターネットを利用しているのは百校プロジェクト参加校か、大学の付属小学校などほんの一部にすぎない。「調べ学習」には身近な地域の産業などを調べ、結果をまとめて発信するやり方と、前述の平野小学校の場合のように「おたすけメール」と呼ばれる学外ボランティアにe-mailで質問する方法がある。前者の場合は「感想をお聞かせください」、「お手紙ください」と、子供たちは発信にたいする応答を期待しているが、待っても返ってくることはまれでがっかりさせられることになる。後者については、佐伯胖が「新・コンピューター教育」のなかで否定的な意見を述べている。子供たちに「どうしてもここが知りたい」という探求心もなく、「自分はこう考えるが実際はどうなのだろうか」という仮説もなく、手に入れた結果にたいする検証もないと安易なインターネットの利用のしかたを批判している。⁽²¹⁾ インターネットよりも図書館で百科事典を調べさせるほうがよほど教育的ではないかという意見もある。こういった批判にたいして平野小学校の石原一彦教諭は、インターネット利用の目的は、まずなによりも子供たちのモチベーションを高めることにあると反論している。自分で百科事典を調べるほどの学習意欲をもつ子供は一学級にせいぜい一人か二人であるが、インターネットならばやってみようと意欲を示す子供の数はぐっと増える。またインターネットという新しいツールに慣れ、使いこなせるように子供たちを導くことの意義は否定できない。

1997年3月に文部省が実施した小学校、中学校、高等学校教師のパソコン活用能力（ワープロ、表計算、通信などどれかひとつのソフトウェアを使えばパソコンが使えると定義）調査はパソコンが使えると回答した教師は二人にひとり、子供たちに教えられるのは五人にひとりという結果を示している。⁽²²⁾ キッドピクスで子供たちに絵を描かせてインターネットにのせたり、あるいはデジタルカメラで写した子供たちの作品を取り込んで発信するといったスキルをもつ教師は今のところまだほんの一握りだといわねばならない。

む す び

1997年10月1日と2日の二日間韓国国立忠北大学および韓国国立教育大学で教科教育とコンピューター教育に関する国際会議が開催された。日本、台湾、オーストラリアが参加したこの会議の基調講演でも、また各分科会でもスピーカーに共通していた問題意識はグローバリゼーションとインフォメーションの時代に向かって「変わる教師の役割」であった。韓国では今年より小学校3年生から英語がカリキュラムに加わえられている。現有のスタッフで英語を教えていくためにはマルチメディアの活用は必須である。また社会のニーズに応えるために生徒がラップトップ・コンピューターをノート代わりに使用する方向に進んでいるオーストラリアのクラスルームでの学習状況が報告された。⁽²³⁾ 同じ方向を目指すには東アジアの国々はオーストラリアの場合よりも高いハードルを越えなければならない。物理的困難と制度的な問題がある。東アジアの学校はヨーロッパ文化圏の国々の学校に比べてクラスサイズが大きいのが普通である。普通教室で30人を越える生徒ひとりひとりがラップトップを使用するためのコンセント、

校、あるいはプロバイダーが千葉から近い場合は時間はそれほど気にならなかったようであるが、回線の末端につながっている小学校の場合はひたすら待たざるえなかった。スピードの問題は予測されたことであったが、その他にもフリーズ状態になったときの処置の仕方や、どのキーワードで自分の求める情報にアクセスできるかなど、経験しながら学んでいくべき問題点も明らかになった。「楽しかった」、「もっとやってみたい」とインターネットそのものに対しては全員が前向きであることもわかった。

1997年6月～7月の時点でホームページを開設している小学校の数は意外に少なく、学生が検索したうち、高知県は1校のみ、長崎県と島根県は2校、最も多かったのが岐阜県と愛知県の16校であった。⁽²⁰⁾ またホームページの開設には必ずしも学校として取り組んでいるわけではなく、職員有志であったり、あるクラスであったり、また教育委員会であったりする。ホームページの中味に関しては前述の京都府京田辺市薪小学校の例からもわかるように情報を発信する側の目的が必ずしも明確でないため、情報の受け手の側の学生も小学校のホームページなるものをどのように受けとめるかにとまどいを感じたようである。「開いてみたら写真の方が多かった。もっと文章での説明がほしい」、「小学校のホームページを開いて見ている人がいるのだろうか」、「各学校のホームページの様式がそれぞれちがうので、関連のある内容を比較するのは大変である。校名を書き込む場所だけでも統一されていれば見やすい」という感想があった。シンガポールの小学校のホームページは、親の学校選びのためのカタログという性格をもつ。したがって画面デザインには各々個性があるものの、ホームページ開設の目的が明確であるためインターネットに載せる基本的事項は各学校とも共通している。その意味で比較しやすい。むしろ情報の受け手に比較してもらうことを考慮して作られているといい。シンガポールの小学校の場合表紙の役割をするホームページには学校名、校舎の写真および学校のシンボルマークが表れる。つぎの目次には学校の教育方針、使命、歴史、校長からのメッセージ、教職員紹介、学校までの道案内、学校設備の紹介（コンピュータールーム、音楽室、体育館、図書館など）、特別プログラム（スポーツ、音楽、アートなど正規のカリキュラム外の特別学習）、課外プログラム（キャンプ、海外体験旅行など）が並び、そこからそれぞれの本文ともいべき中味へと導かれる。また小学校3年の終わりに行われる学習到達度テスト（一種の選別テストで、成績優秀な子供は“gifted”と呼ばれる特別クラスに入る）で優秀な成績を修めた子供がそれぞれ教師への感謝の言葉を添えて写真入りで紹介されている。これは教育の成果に関する学校から親への格好のアピールになっていると思われるが、インターネットの悪用問題がクローズアップされてもいる現在、このような子供の個人情報公開のしかたはあまりに大らかで、無防備にさえ感じられる。しかし一方つとにいわれているシンガポール型エリート主義の一端をここからうかがうこともできる。

小学校のホームページ検索の結果どのような教育利用が考えられるかという質問（Appendix I - 14）にたいして、インターネット利用が始めてだったこともあり具体的な利用法を考えるまでにはいたっていない。社会科で教科書にのっていないことの「調べ学習」に利用できる、あるいは外国との交流

4. 演習 I A プロジェクト—インターネットを体験する

1996年12月から千葉敬愛期大学でも研究室と図書館からのインターネット利用が可能になった。演習 I A（松原担当）のクラスでは前期演習プロジェクトの一つとしてインターネット体験を取り入れた。インターネットを利用した情報の受信／発信を経験するには当面（1）e-mailと（2）WWW（World Wide）のふた通りが考えられる。プロジェクトを開始するにあたってゼミ生のワープロ能力に関する予備調査を行った。31名中ブラインドタッチでワープロが打てるのは1名のみで、残り30名は1本指でキーボードを見ながらなんとか打てるという状態であったため、ゼミ生の負担を考えて今回のプロジェクトではe-mailは見送ることにした。（2）のWWWでなにをするかであるが、学科の性格およびゼミ生の関心を考えて、一人が一県を担当し、各々の担当県の小学校のホームページを検索することにした。検索した県のなかから興味をもった学校のホームページをプリントアウトし、14項目の基本的な質問（Appendix 1）に答え、インターネットとはいかなるものか、どんな教育利用が可能かを考えるところまでを課題とした。ただしインターネットという言葉は全員が知っていたものの、ふれたことがある学生は一人もおらず、誰かがインターネット検索をしているのを見たことがある学生さえもいなかった。そこで目的の情報を手に入れるための簡単なマニュアルを準備した（Appendix 2）。物理的環境が整っているとはいいいがたい状態であったが、学生に研究室を解放するという初等教育科の方針に沿って、嶋学長の研究室と松原研究室のコンピューターを使うことにし、また多くをお願いして図書館の司書の方々にもご協力をいただき、学長研究室、松原研究室、図書館の三カ所から31名のゼミ生が各々の都合の良い時間帯を選んでアクセスを開始することにした。嶋学長の研究室と図書館はウインドウズ95、松原研究室はマッキントッシュだが、ネットスケープのアイコンを見つけてそこをクリックさえすればあとは同じであることを説明することから始めた。マウス操作は全員が情報処理の授業ですでに経験していたので問題はなかった。マニュアルを作成するにあたって二つのことに特に注意した。（1）全くの初心者である学生が混乱しないように簡単かつ丁寧であること。すでに知っているものには極めて初歩的で簡単なことが、初めてのものには大変なことに見えるものである。面倒だ、大変だと思わせないように導くことを心がけなければならない。（2）小学校は「地域情報」であること、「地域情報」から担当する県を選び、そこから小学校のホームページへ、そこからさらに中へと次々に扉が開いていくインターネットのスリルを経験させること、この二つである。

6月20日から始めて7月20日までにやり終えた27名中インターネットのやり方が「わかった」と答えた学生は12名、「なんとなくわかった」と答えた学生は14名、無解答1という結果を得た（Appendix 1—12参照）。また「マニュアルどおりにやったら簡単にできた」、「ワクワクした」、「ほんとうに画面に現れたときは感動した」と記した学生もあった。これらの感想からもわかるようにインターネット上で求める情報にアクセスすること自体は難しいとは感じなかったようである。問題は時間である。小学校のホームページは写真をはじめとする画像が多く、読み込みに時間がかかる。大学の付属小学

を踏まえ、1997年より全中学校にIT教育が広げられる。カレッジ2校では1997年よりJCNet (Junior College Net) プロジェクトによるインターネット利用教育が開始された。

1997年現在シンガポールの全学校のインターネット接続は完了している。小学校には平均100台のコンピュータが設置され、1999年にはその数は150台(生徒6～7人に1台)にまで増加される。中学校では現在の平均40台が1999年には340台(5人に1台)にまで大幅に増加される。マスタープランによれば2002年には生徒2人に1台となる。また1999年までに小学校から大学まで全教員のITトレーニングが終了し、全教員がインターネット・アカウントを持ち、コンピュータは教育に不可欠のツールとなる。その目指すところは、学校間の教材、指導案の共有など、先に述べたコンヴィヴィアルな学びの場を作り出すことである。「Singapore One - One Network for Everyone」の標語が示すように家庭でのインターネット利用も奨励されている。コンヴィヴィアルな学びの場の創出というやや抽象的な目標とは別に、家庭での教育に関連したインターネット利用には実利的な側面があり、現段階ではこれがシンガポールのインターネットの教育利用をユニークなものとしている。その背景には多民族、多言語国家シンガポールの特殊事情がある。後に述べる日本の公立小学校のホームページが誰に向かって、なんの目的で情報を流すのかが曖昧で焦点が絞り切れていないのにたいしてシンガポールの場合その対象と目的は明確である。ホームページ開設の目的はまず親に学校選びの情報を提供することにある。シンガポールでも交通の便を考慮して最寄りの小学校に子供を入学させるのが一般的ではあるが(学校から2km以内に居住する子供の入学が優先される)、家庭の教育方針に合わせての学校選びも可能である。インターネット上のスクール・ウェブ・サイトは学校長が自らの使命、学校の教育方針、教育目標を親に向けてアピールする場になっている。この点日本の学校が職員有志、あるいはクラスが主体となってホームページを開設するのとは趣を異にしている。さらに掲げられた教育目標が題目だけの空疎なものではなく現実的なものであることを示すための詳細なカリキュラム、課外活動報告、教職員の顔ぶれが紹介されている。また教育省のサービスページでは各学校の最新の入学登録状況を知ることができる。学校毎に中国語、マレー語、タミール語のどの母語の生徒の受け入れが可能なのかも同時に公開されている。この三つのうちどの母語でも受け入れ可能な学校が数としては圧倒的に多いが、中国語のみの学校もあり、また中国語とマレー語、中国語とタミール語という組み合わせの学校もある。学校との連絡や問い合わせもe-mailでできるようになっていて、通常その任に当たるのは校長である。学校経営における校長の能力がインターネットを通じて常に試されるシステムが出来上がりつつある。学校のホームページはそれぞれ工夫をこらしているが、それによってインターネットという新しいツールを使いこなしているか否か、校長を始めとして全教員の力量が一目瞭然となる。シンガポールが学習面で厳しい競争社会であることはよく知られているが、生徒にとってだけでなく、教師にとっても競争社会であり徹底した能力主義であることがインターネット上の情報から見えてくる。⁽¹⁹⁾

たにしてもどこで入手できるのかは一般には知られてはいなかった。インターネット上に情報を発信するのに出版社を探す必要はない。コンピューターがあれば自分が出版社になれるのである。また一方において「エシカル・スペクタクル」は、誰もが情報の発信者になれることについての肯定的側面も認めている。その点でのノーム・チョムスキーの著作の出版は象徴的である。言語学者であるばかりでなく左翼思想家として、また歴史家として、自分自身の信じるところに従ってアメリカ政府の外交政策を厳しく批判してきたチョムスキーの著作を引き受ける大手出版社はなかった。弱小出版社から出されたチョムスキーの著作は一般の書店では見つけれず入手困難であったが、今ではインターネット上のチョムスキーのホームページで読むことが可能である。⁽¹⁷⁾

アメリカでは1996年2月に「通信品位法」(The Communication Decency Act)を成立させ、18才未満の子供の目に触れるのを知りながら、猥褻な画像をネット上に流した者には罰則を科すとしたが、これに対して「通信品位法」は言論の自由を保障した憲法に違反すると市民団体などによる提訴が行われた。米連邦最高裁は、同法はインターネット上に新しい言論の自由市場が育成される可能性を阻害するとの見解を示し違憲であるとする判決を下した。いかにして子供を有害な情報から守るかについてはフィルタリング・ソフトの開発、プロバイダー業者に自主規制を求めるなどが考えられているが、いずれも有効な決め手とはなっていない。家庭にインターネットが普及しているアメリカの場合家庭での野放し状態が問題になっている。子供のインターネット利用を実りあるものにするためには親の指導が不可欠となるが、そのための支援ネットも充実している。また規制や子供のインターネット利用の是非に関する意見交換もインターネット上で活発に行われている。⁽¹⁸⁾ インターネットの本来のあるべき姿がここに見られる。

3. シンガポールにおけるインターネットの教育利用

21世紀に向けて職場や学校ばかりでなく家庭をも含む社会全体のネットワーク化を目指して国をあげて情報教育に取り組んでいるのがシンガポールである。シンガポールの“インテリジェント・アイランド”化を目標に、NCB (National Computer Board) を中心に11の主要産業界から200名の委員が参加し、1991年から「IT 2000」マスタープランの作成が開始された。「IT 2000」のゴールとして次の5項目が掲げられている。(1)シンガポールを世界の中心に発展させる、(2)エコノミック・エンジンの後押しをする、(3)国民個々の能力を向上させる、(4)シンガポールのコミュニティーを地域内部で結びまた世界と結ぶ、(5)生活の質を向上させる。1997年4月28日の教育大臣のIT教育開始スピーチではこれらのゴールの実現が若い世代の教育にかかっていることが強調された。初等教育レベルではAITP (Accelerating the Use of IT in Primary School) 指定校6校でのパイロット・プロジェクトが1995年からすでに開始されている。1997年からは残る191校にもプロジェクトが拡大され、近い将来全小学校のネットワーク化が実現される。中等教育レベルでは1996年から始まったSTW (Student's and Teacher's Workbench) により、同じく指定校6校におけるパイロット・プロジェクトでの経験

ここで注意を引くのはメディア・リテラシーの項目である。⁽¹¹⁾ インターネットに情報を発信するために必要な技能の習得はほぼカバーされている。これだけの経験を積んだ子供はインターネットに尻込みせずすむ。また平野小学校では表現の場としてのインターネット利用に力を入れている。⁽¹²⁾ これまで表現の場は作文コンクールなど教師の目から見た“優れたもの”にしか与えられてこなかったが、インターネットでは誰もが発信者になれるというところに注目している。インターネットはそもそも反体制の草の根が育てたものであり、誰もが発信者になれるところにその最大の特色がある。⁽¹³⁾

インターネットの普及は少数の個人が我々が何を見、読むかをコントロールしていた従来のメディアのあり方を大きく変えつつある。それはホームページ作成過程によく現れている。学校のコンピューターがインターネットに接続されるとまず取りかかるのがホームページ作成である。しかし何を、何のために発信するのか確たる方針もないまま漠然としたオーディエンスを期待してインターネットという大海にとりあえず情報を放出するのが現状である。それは不特定多数の人たちに向けての「電子版広告チラシ」にすぎないという批判もある。⁽¹⁴⁾ 一方情報を発信するという経験はメディア・リテラシー教育の絶好の機会となる。子供たちは、ホームページ作成をとおしてメディアがいかに構成されるかを体験をする。例えば学校の、あるいはクラスのホームページを作成する際子供たちはできるだけイメージを良くしようと心がける。日ごろ不便で退屈と感じている田舎が“静かな田園”となり、老朽化した校舎は、“伝統の重みのある木造”と表現される。この過程で子供たちはごくあたり前のように巧みに現実を構成する。それがテレビ番組や広告が作られる過程と似通っていることに気づかせるのが教師の役割である。

インターネットの普及がコンヴィヴィアル⁽¹⁵⁾ な学びの場を作り出した場合、かつて考えられなかったほどの教育の変革がもたらされることが予想される。しかしこれまで産業文明が産み出したさまざまな道具が人々を豊かにし幸せにするよりも権力の集中をもたらし、しばしば人間を機械の付属物に変えてしまったようにインターネットも使われ方次第では歪んだ社会を作り出す危険性をはらんでいる。インターネットにはこれまでのメディアが社会や人間にたいしてもっていた価値の制度化や権力の集中による管理とは別種の危険性がある。「エシカル・スペクタクル」⁽¹⁶⁾ はインターネットの危険性について次ぎの点を指摘している。まず子供にとって最も危険なのは、インターネットでは労せずして簡単にあらゆる種類の情報が入手できることである。図書館に足を運んで検索し、本を借り出して必要な情報を入手することに比べてインターネットは時間とエネルギーを節約できる。しかしインターネット上の情報は従来のメディアのようになんらかの組織による管理やチェックなどの一切の責任から自由である。但し、現在インターネット上に放出されている子供にとって危険と見なされている情報が新種のものというわけではない。現在インターネット上で入手できる情報は、インターネットの普及以前にもどこかで、なんらかの方法で入手可能であった。爆弾製造法、各種薬物の効果、ポルノグラフィ、自殺を誘発するカルト宗教への勧誘などはインターネット以前にも印刷物のかたちで存在していた。しかしこれらの出版を引き受ける出版社はどこにでもあるわけではなく、また出版され

トが導入され、一層の広がりをもつにいたったという経緯がある。日本の学校の場合はそういった実績もないまま学校がいきなりインターネットの情報の海に放り出された観がある。個人的に早くからコンピューターを使い、インターネットも利用していたという教師がリーダーシップを発揮できた幸運な場合を除けば、ほとんどの学校が基礎的な操作段階での困難に直面している。ゼロからのスタートである。1996年8月からインターネットに取り組み始めた京都府京田辺市薪小学校の場合、問題点として次ぎの三つをあげている。(1) (ホームページ) 作成者にHTMLに対する知識が全くなかった、(2) (ホームページ) の内容について、どのような情報を載せるのか、(3) 学校教育活動の中でどのような位置づけになるのか。(2)と(3)はインターネットを導入する際にどの学校も共通して経験する問題である。⁽⁹⁾ 加えるに、担当教師以外の教師の無関心がある。担当者はとかく孤立しがちな環境で悪戦苦闘をしいられる。上記の(3)を確立するためには全教師の意識を高めるところから始めなければならない。これには技術的な問題よりもさらに大きな困難がともなう。技術的な問題の方はソフト開発が進んでいる現在関心さえあれば比較的容易に乗り越えられるものである。

「百校プロジェクト」に参加した津市立平野小学校の場合は技術面で優れた一人の教師の熱意によって、インターネット利用教育ではモデル校となっている。平野小学校ではまず手作りの校内LANを構築し、普通教室からもインターネットにアクセスできるようにし、授業だけでなく、日常的にインターネット利用が可能になるところまで発展させている。教職員もコンピューターがなければ仕事にならないほど学校内にコンピューター利用を“文化”として根づかせることにも成功している。平野小学校の6年生は、年間35時間を使って下記の学習を行った。

時 数	学 習 内 容	メディア・リテラシー Ⅲ
1～5	HTMLの基礎、自分のページ作成	・テキストエディターによる文字入力 ・フロッピーディスクへの保存
6～12	平 和 へ の 提 言	・HTML ファイルの作成 ・基本的なタグの理解
13～16	課 題 研 究 の ま と め	・FTP の使い方 ・スキャナーを利用した画像入力
17～19	発 信 内 容 の 検 討	・フォトタッチソフトによる画像処理 ・タグによるページの装飾
20～24	HTML ファイル の 作 成	・デジタルカメラの使い方 ・CG作成
25～35	交 流 、 反 省	・リンク集の作成

メディア・リテラシーの中心的課題は偏見から自由な人間、賢明な消費者を育てることにある。従ってジェンダーに対する見方（ステレオタイプな見方に陥っていないか）異人種、異文化に対する態度、消費行動といったことに特に注意が払われる。こういったことを学ぶ過程で自分とは関係のないものとして見ていた“他者”への関心⁽⁷⁾が増し、公平や公正にたいする自覚が促される。

メディア・リテラシー教育が進んでいるカナダでは、高校レベルでのメディア学習はすでに定着しているが、前述のような課題を考慮して学習開始の時期をさらに早めて小学校から始めることも考えられている。新しい試みを始めようとする際に共通して直面するのがカリキュラムの問題である。子供たちにとっても、教師にとってもあまり余裕のない時間割のなかにメディア・リテラシーをどう組み込んでいくかである。限られた時間とエネルギーをどう配分するかを考えなければならない。メディア・リテラシーを新しい教科としてカリキュラムに加えるのではなく、現在ある教科のなかでの活用を考える“統合”という方法が望ましいであろう。メディア教材は文字であれ、映像であれ、そこに表現された現実とは完全に中立ではありえないし、価値観を含んでいないこともありえない。その点を子供たちに理解させることがメディア・リテラシー教育の出発点であり、それは社会のクラスでも理科のクラスでも実践可能なことである。批評家の目をもってものを見、自分の判断したことを口頭で、あるいは文章で表現する能力を養うためには自分が良いと思う（娯楽として楽しいと思うものでもよい）テレビ番組について仲間にすすめる推薦文を書かせる。高学年ならば、低学年の子供にすすめる推薦文を書かせる。だれが読むのかもわからない作文を漫然と書くのとはちがいこの場合は読み手ははっきりしている。また自分がよく知っているテリトリー内のことについては子供は多くを語りたがるものである。こうした子供たちの自主性を引き出すためのアイディアを考え出し、実践し、その結果を教師の間で検討する。成果があったと認められたものについてはこれを他クラスにも広げていく。カナダで行われているこういった試みは教師に意欲さえあれば日本の教室でも実行不可能なことではない。メディア・リテラシー教育の広がりが見られるか否かは、従来型の閉ざされた教室から開かれた教室への教師の意識改革にかかってくる。インターネットは開かれた教室、つまり“アイディア”の共有、“知”の共有を進めるための理想的なツールとなりうる可能性をもっている。単なる便利な道具というあり方を越えて教育におけるインターネット利用が注目される理由はまさにこの点にあるといっ

2. インターネット

文部省と通産省が1994年に開始した学校間をインターネットでつなぐ「百校プロジェクト」（1997年3月終了）に刺激されるかたちで多くの小・中学校にインターネット接続のパソコンが入り、それ以来ホームページ開設が流行のようになっている。⁽⁸⁾ 欧米の学校ではネットワーク化の第一歩としてまず電話回線を使った電子メールによる他校、地域公共施設、学校外の専門家、ボランティア等の学習協力者との間の通信が開始された。電子メールによるさまざまな交流を経験した後にインターネッ

AIDS 伝染などに巻き込むこともできる。メディアは我々を国内の問題にも、世界の問題にも密接に関わらせる。世界はマクルーハンのいうところの“グローバル・ヴィレッジ”となっている。

(7) メディアの様式と内容は密接に結びついている。

マーシャル・マクルーハンが指摘したように、メディアはそれぞれに、それ自身の文法をもち、独自の方法で現実を組み立てる。したがって同じ出来事を報じて、メディアによって異なる印象を与えるし、異なるメッセージを伝える。

(8) メディアはそれぞれ独自の美学をもつ。

ある種の詩や散文には心地よいリズムがあるように、さまざまなメディアがもつ心地よい型や効果を楽しめるようになるべきである。⁽⁴⁾

上記のメディアに関する基本概念を踏まえたうえで、(1)日々接するメディアを取捨選択し、理解し、評価し、思慮深く反応する能力を身につけ、(2)メディアがどのように機能し、意味を作り出し、現実を構成するかを知り、(3)注意深く見、熟慮の上判断を下す能力を養うことが我々の目指すメディア教育の本質である。⁽⁵⁾ こういった能力は一生を通して身につけていくものであるが、ここでは学校教育においてメディアに対する子供たちの目を開かせる意味と教師の役割について考えてみたい。“メディア”から我々がまず連想するのはテレビであるが、メディア・リテラシーではメディアのあらゆる分野、ラジオ、映画、印刷物、流行の音楽、ファッション、子供に人気のある玩具や人形、あるいはロゴや絵柄のついたTシャツも教材として取り入れるべきである。子供は祖父母の時代ばかりでなく、父母の時代とも比較にならないほど多種多様なメディアに日々接しているのである。一方メディアをとおして我々が学ぶものにはたいした価値はなく、つまらないものだという見方もある。仮にあるテレビ番組の内容が価値のないものだとしても、それを何百万人もの人々が見ているという事実は取るに足らない、つまらないこととして片づけることはできないだろう。クラスのほぼ全員が前日の夜テレビで同じ番組を見ていたといったことはよくあることである。メディアは我々の文化の表現手段であり、文化を分かち合う手段でもある。良くも悪くもメディアは我々の文化である。それを理解していなければメディアを我々の文化として所有していることにはならない。

メディア・リテラシーに関する哲学的意義とは別に、メディア学習を教室に持ち込むことの実利的な面も重要である。メディア・リテラシーを教育の一環として教室に取り入れることの利点はまずなによりもそれが生徒のモチベーションを高めるということである。この点は多くの現場教師によって指摘されている。⁽⁶⁾ 子供たちが学ぼうとするメディア教材には子供たちの方が教師より多くの時間接していてよく知っている場合が多い。印刷物中心の従来型授業では能力を発揮できなかったタイプの子供が、メディア教材を用いた視覚的授業で思いがけない才能を見せたりもする。メディア教材を用いることで教師から生徒への一方通行の授業から双方向へ、場合によっては生徒主導の教室の“民主化”が行われる。教室の“民主化”とは知識の伝達中心の授業から、情報をどう扱い、評価するか授業の中心が移っていくことを意味する。

を始めているシンガポールの事情、(3) 演習 I A のクラスでのメディア学習の試みを通してメディア、特にインターネットの教育利用を考えてみたい。

1. メディア・リテラシー

メディア・リテラシーに関しては早くは、1978年にトロントで創設された市民組織「メディア・リテラシー協会」AML (Association for Media Literacy : Ontario) によるメディア教育のモデルともいべきガイドブックが出版されている。⁽¹⁾ メディアとは何かについては、AMLが基本概念として掲げる次の八項目がほぼ定着して受け入れられている。

(1) メディアはすべて構成⁽²⁾されたものである。

メディアは外面的現実の単なる反映ではなく、多種多様な決定要因と決断によって巧妙に構成されたものである。メディア・リテラシーはこれらの構成されたものを一度ばらしてみることである。

(2) メディアは現実を構成する。

観察や経験の上に我々は世界とは何か、それはどう機能しているかを思い描くが、我々の頭の中には物事に対するときの態度、解釈、結論がメディアによってすでに組み入れられており、それはメディアが前もって構成したものである。しかるに、我々の現実を構成するのはメディアであって我々ではない。

(3) オーディエンスが各々メディアの意味を読み取る。⁽³⁾

我々が何ものであるかという問いは、我々がどのように情報を処理するかに関わってくる。各々がさまざまな要素（個人的欲求や不安、一日の中の喜びや苦勞、異人種や異性に対する態度、家庭的背景、文化的背景）をとおして、それぞれのやり方で意味を見い出したり、また読み取ったりする。

(4) メディアは商売と密接な関係にある。

メディア・リテラシーはマスメディア作品の経済的根拠、それが内容、技術、配給にどのように影響を及ぼすかに気づくことを含む。メディア製作は商売であり、利益を生み出さなければならない。メディアの所有、支配、それに関連した影響という問題も研究しなければならない。相対的にみて、少数の個人がメディアを通して我々が何を見、読み、聞くかをコントロールしている。

(5) メディアにはイデオロギーと価値観の伝達が含まれる。

全てのメディア作品はある意味で宣伝である。作品自体の宣伝ばかりでなく、価値観や生き方の宣伝でもある。主流メディアは、明に暗にイデオロギー的メッセージを伝達する。それには次の全て、あるいは一部が含まれる：「良い生活」というものの性質、そこに含まれる豊かさの役割、「消費主義」の美点、女性の役割、権威の受容、至上の愛国心。

(6) メディアは社会的、政治的意味をもつ

メディアは世界の政治や社会の変化と密接に結びついている。テレビが、主としてイメージにもとづいて国家指導者を選ぶことも可能であるし、また同時に我々を市民権運動、第三世界の飢餓、

メディア・リテラシー

— インターネットの教育利用を考える —

松原真沙子

Media Literacy

— Use of the Internet in Schools and Classrooms —

By Masako Matsubara

はじめに

西洋から新しい概念を取り入れる際に起こる意味論的混乱は歴史のなかで繰り返されてきたことである。新しい概念にどのような日本語訳をあてるかで受け手のイメージが変わる。“メディア・リテラシー”も例外ではない。メディア・リテラシーは「メディア活用能力」と訳される場合が多い。この訳が教育と関連して使われた場合、メディアを教育に利用することについての肯定的イメージが強調される。ここでイメージされるのは技術面での活用能力、つまりコンピューター・リテラシーに近い技能的なものである。しかし一方1980年代にすでに公教育の一環としてメディア・リテラシーに取り組んできたカナダ、オンタリオ州の場合はメディア・リテラシーを「メディア教育」ととらえている。メディアは、社会の多くの領域で支配的な力を発揮してきたにもかかわらず長い間学校のカリキュラム外に置かれ、教育としての取り組みがなされなかった。子供がテレビ視聴に費やす時間は膨大である。その他映画、雑誌、広告等とともに子供は日常的にメディアの洪水のなかに置かれているといってもよい。たしかに直接的経験を除けば、我々が一生の間に得る知識というものはなんらかのメディアをとおして学ぶものである。おくれればせながら日本でもこのようなメディア環境の意味するところを子供に理解させることは学校教育が担うべき重要な役割であると認識されるようになってきた。メディアが発する情報をただ受け入れるのではなく、自らの力で読み解き、選択し、分析する能力を養うことの必要性が求められるようになったのである。特にメディアの多様化が急速に進んでいる今日、メディアが与える社会的影響はこれまでとは比較にならないほど大きくなっている。メディアの多様化のなかで特にクローズアップされているのがインターネットの普及である。本論文では、(1)「メディア教育」の分野で日本よりも進んでいるカナダをはじめとする諸外国ではメディア・リテラシーをどうとらえ、どのように取り組んでいるか、(2) IT (information technology) 教育を21世紀に向けての国をあげての教育目標として取り組み